

R10 SYWL 2022 report - 11th - 14th August

SB: Hisao USUI, Rin Yamazaki, Eiko Nakajima

YP: Takefumi Yamada, Jiong Dong

2022年8月11日(木)から14日(日)に、韓国の済州島のJEJU SHINHWA WORLDにて2022 IEEE R10 SYWL Congressが開催された。本イベントは、Asia-Pacific RegionからIEEEに所属する学生や研究者、技術者、教授らが133名集まり、世代や、国籍、所属、立場を越えた交流を行うイベントである。

Program

▶Day 1

- Registration
- Opening Ceremony
 - Welcome Address
 - Congratulatory Speech
- Plenary Session I
 - Evolution of Mobile Communications towards 6G
 - SYWL2022 Orientation
- Welcoming Dinner

▶Day 2

- Plenary Session II
 - AI Robot and Moonshot program
 - IEEE YP and Volunteering Platform
 - Delivering high-impactful humanitarian engineering programs at a global scale
- Parallel Session I
 - SB, YP, WIE, LMAG
- Parallel Session II
 - SB, YP, WIE, LMAG
- Award Night

▶Day 3

- Plenary Session IV
 - Professionalism – a matter of principles
 - Benefits from IEEE Foundation
- Parallel Session III
 - Industry & Technology, Humanitarian Technology Activities, IEEE R10 EXCOM Talk, Why IEEE?/STARTUP
- Team Bonding Activities
- Culture Exhibition
- Culture Night

▶Day 4

- Technical Workshop
 - Contemporary Researches on Information Technologies
- Closing Ceremony

Venue

JEJU SHINHWA WORLD, Jeju Island, Korea

Website

http://sywl2022.ieeer10.org/index.php?hCode=GREET_01_01

1, Day1 First impression

~Reported by Hisao Usui~

私にとって韓国は、留学以外での初めての、しかも単独の海外でした。英語もほとんど通じない上ネットも通じないなど多くの不安の中前泊をし、空港から会場へのシャトルバス乗り場ではじめて英語が通じる人に会えました。同じR10SYWLの参加者でした。

そこで仲良くなったKevinとそのあといろいろと一緒に過ごすことになりました。メインセッションが始まるまで、ホテルのきれいな部屋に感動したり、カジノでお金を溶かしたり、Kevinとハーゲンダッツを食べたりしていました。もっぱら観光ですね。その時、どうやらKevinは先生らしかったので、博士進学についての話なども聞きました。そして、一応見ておこうとして覗いたメイン会場。ここで、TシャツGパンという自分の作業着のような服装を反省しました。豪華絢爛ながらも落ち着いたその会場は、セッションだけでなくディナー会場でもありました。周りの多くの人はフォーマルな服装でした。この豪華さなら納得だと、思いました。

いざセッションが始まってみると、学会での招待講演や基調講演のような物がずっと続きました。学会への参加経験があればあまり怖くないなと感じていました。今回学部生だったこともあり、こんな豪華なイベントに参加しているのか。ここに日本からの参加者として僕は立っているのか。そんなことで頭がいっぱいになりながら1日目を過ごしました。



バスを待つ際の集合写真。左端がKevinで右端が臼井。

~Reported by Rin Yamazaki~

今回の海外渡航は、私にとって2度目の海外で不慣れなうえに出発地である仙台から到着地である現地まで1人で行動するということで、緊張を感じ続けながら韓国入りをした。しかし、済州空港に到着した瞬間からのワクワク感が増大していく感覚があった。送迎バスのバス停には、IEEEと書かれた帽子をかぶる中国のLMAGの方々がいらっしゃったが、話しかけることはできな

かった。本当に自分はCongressに参加するのだと、ここで実感がわいた。不安と心躍る気持ちを両方抱え現地に着くと、チェックインの際、私の前後に並ぶ人が日本人っぽかった。思い切って話しかけると、日本人であった。えいこちゃんと橋本先生であった。初めて日本語を耳にしたこの時の安心感はすごかった。

いざチェックインを行い部屋に入ると、高級感あふれる内装に時が止まった。人生初のリゾート地で興奮し続けた。と同時に、もはや不安などなくワクワクが止まらなかった。

レジストレーション後はメイン会場に行き、他の日本人メンバーと合流した。ここで正直大きく感じたのは、“場違い感”である。おいしいコース料理と最高のおもてなし、韓国の演舞、周囲で飛び交う英語...国際色が豊かな空間で世界の視座で行われるCongressに圧巻され、衝撃と刺激の連続であった。

また、本Congressの参加者データが発表されたとき、なんと日本支部は参加国の中で第3位の参加人数であった。このことから日本国内でのIEEEの活動が盛んであることを読み取れた。その一部分を東北大学のSBでも担いたいと強く感じた。

1日目はきれいなホテルや施設、会場の雰囲気のにめれながらも、学会組織としての規模感やIEEEに所属することの意義を感じ、かみしめた時間であった。世界にコネクションを持つことの意味を理解した気がした。今日から始まる4日間は忘れられない参加になる予感がした。

~Reported by Eiko Nakajima~

早稲田のIEEE SBに入ってすぐに本会議のお知らせがあり、IEEEのStudent, Young Professionals, Women-in-Engineering, Life Memberという様々なバックグラウンドを持つ研究者の方が集まる済州島での会議で、Computer ScienceやITの分野において、世界を舞台にした学会とはどのようなものなのかに興味を持ち、参加を決意した。ただ、学部生が参加しても大丈夫なのか、一人でたどり着けるのか、さらに、コロナ禍の海外であったので、不安で緊張することが多かった。しかし、会場に到着すると、国籍の異なる多くの参加者の方が楽しそうに会話して、気さくに話しかけて下さった。また、IEEE日本支部の方々、SBのメンバーと、初対面であったが、共に協力しながら交流の輪を広げることができた。スピーチに対して、リスナーは、自身の興味のあるポイントに関してスライドを撮影したりと、自由なスタイルで熱心に耳を傾けており興味深かった。中には、名刺をいただくこともあり、将来は私も研究活動などでキャリアを築いてIEEEの会議やイベントで名刺を交換したいと思った。会場では参加者同士が積極的に交流しており、和気あいあいとしていた。周りを気にしすぎることなく、安心して自分のやりたいことを進めることができる雰囲気がありとても良かった。ホテルや、そこでのDinnerがとても豪華で、幸せな気持ちになった。



初日の Dinnerのとき

2, Day2 Panel session

1)SB session

8月12日では、SB参加者との簡単なIce Breakingを行った後、IEEE SB、Young Professionals Memberの特徴を含むガイダンスや、Interpretability of AI、Innovation of MemoryをテーマとしたKeynoteの講演を聞いた。8月13日は、午前中にParallel Sessionが行われ、Industry & Technology, Humanitarian Technology, IEEE R10 EXCOM Talk, Why IEEE/Startup の4つに分かれた。主にIndustry & Technologyのセッションに参加しVideo Coding やSpace Travelについての講演を聞き、とても興味深かった。(中島) 特に、SBセッションで我々にとって重要だったことは、SBはこれをしなさいという連絡だった。正直抜けてしまいがちなことをまた聞くことが出来たのはありがたかった。また、自分は周りのSBとの熟練度の違いも思い知った。他のSBメンバーは思いのほか自分より精神的にも内容も成熟していた。国こそ違えど同じSBの一員として、今後のイベントなどに力を入れたいと、改めて感じた。

完全な余談ではあるが、SBの会場になぜかロボットがいた。それを通じてオンラインで誰かがつながっているようだった。私は何を思ったか集合写真にそのロボットを加えたのだが、思いのほか評判がよかった。誰もしていないことをすることはもしかすると他の人への受けはいいのかもしれない。(臼井)



集合写真(影だけですみません。。。)

2)YP session

(1)YP session1 - Jiong Dong

On the afternoon of August 12, 2022, I participated in the YP track of SYWL 2022. The YP track began at 13:00, and the organizers were Saaveethya Sivakumar (IEEE R10 YP Chair) and Myounggon Kang (from IEEE Seoul Section).

The YP track was divided into two parts: Y1 and Y2. There were four parts in Y1: Opening Remarks, Stepping YP, YP AG Coordination and Best Practice. In the Stepping YP part, the IEEE R10 YP Chair Saaveethya Sivakumar introduced all the basic knowledge about YP, such as membership, member benefits & offers. She gave awareness to student members and new young professionals about the YP. This part enhances new members' knowledge and interest in YP and encourages them to step into YP membership.

In the YP AG Coordination part, the host organized an interactive session with participants to share knowledge about YP affinity group coordination. In this session, we discussed awards, award applications and specific information, funds and funding applications. The delegates presented their suggestions and ideas. In addition, they also discussed how R10 YP has impacted their AG group and how R10 YP can impact Affinity Groups.

Then in the Best Practice part, the moderator invited four representatives from different IEEE sections to discuss how these active sections collaborate with the committee, initiatives, events, the AG's strategic plan, yearly planning, team structure, and what has been done to keep the section active thus far. They also presented victories, defeats, new learning from errors and blunders, and thoughts and assistance for fellow sections participating.

In addition to the above, we also discussed six related issues in groups, such as: how to improve student to YP transition, how to organize regional level YP focused events, membership development & retention, and so on. We had 20 minutes of discussion, then each group selected a representative to make a presentation. There were four judges scored, and finally two groups of winners were selected.

(2)YP session2 - Takefumi Yamada

Young professionals is 27% of IEEE membership. It means 100,000 YPs. It is very effective affinity group for IEEE volunteer. YP's position modernized volunteering as a member benefit, enhance the new IEEE volunteering and expand its reach across all of IEEE.

In YP session, we could share some experience from panelists about their career development, networking and leadership. I was impressed that there were many goals to join IEEE volunteering to hear their conversations. Especially, I noticed that I think they have common scope to continue IEEE membership. It is recognition of volunteering efforts. We know there are different culture, different generation, different knowledge and different many things. What it is only way to understand each other is taking conversation. Regarding as the value of IEEE membership, you can find the place to take conversation EASILY. My purpose to be IEEE membership is to support it to many young professionals and other members. I will provide flexible volunteering opportunities in Japan.



Pic. Panel Discussion - Best practices in Young professionals session on 12th August, 2022

3, Day3 Congress impression

1)Culture ~Rin Yamazaki

Culture Exhibitionでは、ブースを設けて日本文化の紹介を行った。各々が持参した和服や浴衣を着用し、日本の伝統的な民族衣装でみなさんをおもてなした。他国のブースを見ると、韓国のハンbokやインドのサリーなどの自国の民族衣装を身にまとった方々であふれており、とても華やかな空間が広がっていた。多くの方々と一緒に写真も撮らせていただいた。その際にFacebookの交換を忘れ、自分の手元に写真データがないのはとても惜しいことをしたが...

ブースでは日本から個々人が持参したものを並べ、茶道や書道の実演、日本のIEEE Tシャツやお菓子、アニメシールの配布、花札や漫画の展示など様々な日本にゆかりのあるコンテンツを海外の方々に触れて頂いた。中でも大人気で常に列が途絶えなかったのが、書道で名前の漢字を書いてあげるサービスである。名前を聞き、その方のイメージの漢字で当て字を行い、プレゼントをした。漢字の意味を伝えると嬉しそうに私たちに笑顔をプレゼントしてくれた。中にはお土産にしたいとのことでご家族のお名前でご依頼があって、ちょっと緊張した(汗)

みなさんが時間ギリギリまでブースには人が集まってきてくれて、本当に嬉しかった。ありがとう！最終的にはホテルの人に終了を促される始末であった(笑)。ホテルの方、ごめんなさい。

私自身、日本文化を発信する経験は初めてであった。改めて、日本人として日本文化の素晴らしさを感じた時間でもあった。そして日本文化を媒体に海外の方とコミュニケーションをとっていく楽しさを経験できたことは私にとってとても大きな財産である。英語を話すことに抵抗があり別に話せなくても困らないからいいやと思っていた自分だったが、この経験を通して英語を話せるようになりたいと強く思うようになり、自分の中で大きな考えの変化があった。「異文化交流」というたった5文字のことを行っただが、ここでは書ききれないくらいの文字数の経験ができたと感じている。ぜひ来年以降もCulture Exhibitionへの参加は継続してほしいと思う。



公式からの、Culture Exhibitionの際の写真



Cultural Exhibition の様子

2) Culture night - 臼井久生

3日目の夜にCulture Nightがあり、様々な国の人々が歌やダンスなどを披露した。またそのほかに、R10's Got Talentという、平たく言えばカラオケ大会があった。自分はそちらに参加したので、これらについて書こうと思う。

初めに歌やダンスなどについて。事前登録制だったこのパフォーマンスはスリランカセクションやムンバイセクションなどが参加した。エスニックな曲とともにパフォーマンスをするセクション、曲自体はエスニックだけれどもみんなで輪になってワイワイ踊ろうとしたセクションがあった。みんなでダンスをするのは言葉はうまく通じなくとも一体感があってとても心地が良かった。はじめのうちに矢野さんがどんどん前に出て踊ったりしていたけれど、終わった今考えるとどんどん踊りに行けばよかったかもしれない。もっとも、自分はカラオケ大会に出場する事が決まっていたのではじめのうちは気が気じゃなかったけれど。

一通りの団体がパフォーマンスを終えて、いよいよR10's Got Talentが始まった。様々な参加者がいたが、日本からはわたしともう一人、中島さんが出場した。自分は参加登録の時に、ひとつ考えたことがあった。会場をアゲるにはどうしたらいいだろうか。自分はプロ並みに歌がうまいわけではないので、ただ歌うだけではだめだ。そうだ。踊ろう。そう決めて、自分の歌いたい曲の「夜明けと蛍」とT.M.REVOLUTIONの「HOT LIMIT」を歌うことにした。知っている人がいれば万々歳だし、きっと知らなくてもハイテンポだから気分は上がるだろうと考えての選曲だった。

いざ本番となってステージに立つと、カラオケ機が日本のものより少し優しかった。入りのタイミングを書いてくれたのだ。正直HOTLIMITは歌い慣れていないので助かった。1曲目の自分の好きな曲ではやはりと言っていいほど盛り上がりなかった。ひとりだけ、同じ日本の中島さんだけには少し響いたらしい。後で曲名を聞かれた。正直なところ、HOTLIMITの時のことはあまり覚えていない。とにかく身振りを大きく、強弱を大きくして印象に残るようにパフォーマンスをしたことを覚えている。もう一つ、終わった後の拍手の大きさも覚えている。おそらく、今までの中でも屈指の



大きかった。



カラオケ大会(R10'sGotTalent)に出場した中島さんと私

パフォーマンスが終わった後、しきりに周りの人々に声をかけられた。「最高だった」「今日の一番のヒーローはお前だ!」「プロの歌手なの?」などだった。この時ほど、参加してよかった、勇気を出してよかったと思ったことはこの会期中では無かった。間違いなくこの場ではヒーローだった。ひとつ、悔やまれることがあるとすれば、僕の英語力では彼らと連絡先を交換することが出来なかったことくらいだ。



Cultural nightの後、皆さんと

4, Summary

~臼井久生~

4日間の会期をすべて終えて、改めてあっという間の4日間だったと感じた。自分のつたない英語力でも、ある程度講演の内容も理解できた上、友人もできた。(後で調べてみたらすごい大学の教授でした。馴れ馴れしくてすみません。)

統括として、私の立場から書きたいことが3つある。一つ目は日本での英語力とコミュニケーションの多寡は一致しないということ、二つ目はSYWLは講演自体が非常に興味深いものが多いということ、三つ目は恥ずかしがっていてはいけないということだ。

英語に関して、自分はあまり困らなかった。だが、自分は決して英語力が高いわけではなかった。ただ少し乱暴な文法で話すことなどに抵抗がなかっただけなのだ。このSYWLに参加するときに一番不安だった点は、講演の内容やコミュニケーションが満足に理解できるかどうかだった。ただ、1日目にバスに乗るタイミングや、3日目のCulture系のイベントの際に、とんでもない文法を使っても理解はしてくれるんだ。僕は、今、話せている。と感じた。なにより1日目にそれに気づけたことで、かなり多くの人と話すことが出来た。

講演の内容は、事実自分の専門分野でないことが多かった。しかし、驚くようなことばかりを並べてくる講演ばかりで、自分はただただ啞然として眺めていることしかできなかった。それは飽きていたというわけではなく、自分の想像を超えるような事を実現している内容や、自分でも知っている世界に名だたる大企業の研究内容などにただ感動と驚きと、内容の理解で頭がいっぱいいっぱいになったのだ。なにより、研究内容にかかわらないとはいえ世界トップクラスの内容の講演を聞いて、自分もここを目指したのだと感動した。言うまでもなく、モチベーションが非常に高まった。

今回のSYWLでひとつ心がけていたこととして、恥ずかしがっていてはいけないと考えていた。1日目のバスも、3日目のアクティビティも、恥ずかしがらずに行動した結果ある種の見返りが帰ってきている。またそのどちらも今回のSYWLでの一番自分の心に残ったことだった。Japanの一員として、これからもR10に限らず世界を盛り上げて熱狂させていきたいと思った。今回各方面の支援を受けて我々SBやYP等から参加した方々との交流、R10SYWLに参加した際の多くの人との交流、また、自分の人生における転換点もありました。この場を借りてお礼申し上げます。

~Eiko Nakajima~

個人のレポートでも述べたが、本会議を通して、将来、自分自身が関わっていく分野における学会の世界の一部を覗くことができた貴重な経験であった。そして、通信やComputer Scienceの研究や国際学会の様子を見て、学会に対する印象を変えるきっかけになった。大学入学後、授業の大変さから、厳しいハイレベルな競争があるイメージを抱いていたが、会議を通して、将来の不安を少し追い払い、世界の人々と学びながら自身の研究分野を前向きに究めていこうと思えた。

他国からのSBは少なかったが、4日間を通して、久しぶりに多くの人と英語で会話でき、新鮮であった。各大学のSB、院生・学部生関係なく、このような世界の学会に参加することで、将来の研究に対する大きなモチベーションになると思う。今回はparticipantとして参加したが、将来は是非speakerとしてR10のイベントやIEEE主催の会議などに参加して、研究発表してみたいと思う。同じSBのメンバーや日本や海外の先生・研究者の方と、交友関係を築くことができ、今後大切にして、関係を広げていきたい。この先も今回の経験を胸に、努力を続け、私が決めた進路を進んでいくことになると思う。

忙しいスケジュールの中、IEEE日本支部から参加し、現地で支えて下さった皆様に心から感謝いたします。さらには様々な場面で共に協力しながら、交流の輪を広げたり、Culture ExhibitionやCulture Nightで団結して盛り上げたりと、充実した時間を共に過ごさせていただいたSBのメンバーの皆さん、ありがとうございました。皆様の支えがあり、コロナ渦の中、韓国でのSYWL Congressで多くの経験を積み、無事に終えることができました。今後どうぞよろしくお願いいたします。



最終日の集合写真